

## 談話における接続詞 *because* の働きについて

荻原 洋

### On the Discourse Function of Subordinate Conjunction *because*

Hiroshi OGIHARA

E-mail: ogihara@edu.toyama-u.ac.jp

キーワード: Because, Discourse, Modality, Subordinate Conjunction

#### 0. はじめに

荻原(1999)では従属接続詞 *when* の用法を以下の4タイプに分け、その違いを説明するには、談話モダリティへの言及が不可避であることを主張した。

- (1) a. When I was 10 years old, my father died.  
b. My father died when I was 10 years old.
- (2) a. I was playing the piano, when there was a knock at the door. (Quirk, et al. 1985)  
b. He was walking down the street listening to music on his headset when a car hit him. (Quirk, et al. ibid.)

(1)は*when*節で述べられている状況・出来事が、主節で述べられている状況・出来事の生じる時を指定する場合で、二つの状況はある時点では同時に生じているのでこの*when*(節)を「同時用法」と呼ぶことができる。*when*節が主節の前に来る場合(1.a)を同時用法*when*節前置型、後に来る場合(1.b)を同時用法*when*節後置型と呼び区別することにする。

これに対し(2)は*when*節で述べられている状況・出来事が、主節で述べられている状況・出来事より後に(ほぼ連続して)生じているのでこの*when*(節)を「継続用法」と呼ぶことが可能である。継続用法では*when*の前にコンマがある場合(2.a)とない場合(2.b)があり、前者を継続用法コンマ型、後者を継続用法無コンマ型、とそれぞれ呼ぶことにする。

これらの4タイプの違いはおおよそ次のようにまとめられる。

- (3) *when*節が主節の後に生じる場合、同時用法ではそれはモダリティを含まない、純粹に主節の動詞句に含まれる命題成分であり、継続用法ではそれはモダリティを含む独立節である。

(4) 同時用法の*when*節前置型と継続用法の*when*節は、モダリティを含むという点で同じであり、その役割は、場面の転換という形で、前の文(文脈)とのつながりを確保することである。ただし、前者の場合は、現在の場面を一度閉じて新たに別の場面を開くのに対し、後者の場合は、今ある場面を閉じずに、新しい場面を開く、という違いがある。

(5) 継続用法では*when*の前にコンマがある場合とない場合があるが、両者の間に意味的な違いはない。ただし、コンマがない場合は同時用法と形が全く同じになってしまうので、発話者は*when*節の中で副詞句を前置したり、要素の倒置をしたり、また、述べられている状況が非常に劇的・衝撃的なものであるようにしたり、色々工夫しなければならない。コンマのない形がコンマのある形より緊密感が増しているように感じられるのは、このような工夫の多さのためである。

多くの文法書や教科書では、従属接続詞の働きを「主節に従属節を埋め込む」という文内の問題として扱っており、同時用法の*when*節前置型と後置型の違いはさほど問題にしていけないが、両者の間には大きな違いがある。特に同時用法*when*節前置型の文頭の*when*では、先行する文や文脈との関連を、新しい場面を展開するという形で、保つ働きの方が、主節と従属節を結びつける働きよりも重要であるように感じられる。(詳しくは荻原(1999)を参照。)

この小論では、以上の点を踏まえ、接続詞 *because* に関して、同様の観点から、どのようなことが言えるかを探ってみることにする。

#### 1. *because* 節の分布—説明すべき言語事象

原因・理由を表す *because* 節は、文頭、文中、文末のいずれにも生じるが、その分布はかなり偏っている。Quirk, et al. (1985, 15.47) は、London-Lund corpus (spoken texts を多く含む) と Lancaster-Oslo/Bergen corpus

(written texts) から10万語のサンプルを選び、理由を表す従属接続詞 *as*, *because*, *for*, *since* の文中での位置を比較している。

	LL corpus (spoken)	LOB corpus (written)	Total
<i>as</i>	7	19	26
initial	2	9	11
final	5	10	15
<i>because</i>	355	70	425
initial	4	8	12
medial	4	2	6
final	347	60	407
<i>for</i> (all final)	0	64	64
<i>since</i>	5	33	38
initial	2	12	14
medial	1	0	1
final	2	21	23

文末のサンプルしかない *for* は別として、*as*, *since* が文頭と文末にある程度バランス良く分布しているのに対し、*because* は極端に文末に偏っている。(約96パーセントが文末)

ちなみに、手元にあるアメリカ英語で書かれた小説 (Arthur Hailey, *Airport*, 1968年初版, ペーパーバック版で約500頁) の最初の200頁 (語数にして約8000語) から *because* の例を拾ってみると、文頭の例がわずか3なのに対して文末の例は33あり (全体の約92パーセント), 同じように偏った分布となっている。数は数えてないが、*as* や *when* といった他の従属接続詞は文頭/文末のいずれにもよく現れており、対照的である。また、同じ *because* でも *because of* という句の場合、文頭の例10に対し、文末の例7と分布が逆転している。

*because* 節の分布が文末に偏っている理由はいくつか考えられる。一つは、*because* 節は意味的に「理由」を示す場合と「動機」を示す場合があり、「動機」を示す場合は、強調構文の焦点の位置に生じることが出来ない等の理由から、非制限的關係詞節と同様、非制限的用法と考えられ (中右 1984-6, 等), 文末にしか生じ得ないということである。上で述べた小説における分布数の調査では、「理由」と「動機」を区別していないので、必然的に文末の方が多くなっていると考えられる。

もう一つは、「理由」を述べる部分は、意味的には命題内容の一部であるため、話者の心的態度の表明であるモダリティが現れる位置、すなわち文頭よりは、命題の一部であることがはっきりと分かる文末の位置の方が、生じる位置としては自然である、ということである。

「理由」を示す *because* 節は、「動機」を示す *because* 節が非制限的用法なのに対し、制限的用法と考えられるので、その意味では、文末だけでなく、文頭に生じて、意味解釈上は (すなわち、命題内容の理解という点では) 問題を引き

起こさないが、文頭に生じている *because* 節は、文末という、より自然な位置をあえてはずしているわけであり、そこには話者の特別な意図が盛られているはずである。この文頭の位置に生じている *because* 節に込められた話者の特別な意図の内容を検証することが、本小論の目的である。

## 2. 談話モダリティについて

中右 (1984-6) によれば、文の基本的意味構造は、客観的な意味内容である命題と主観的な意味内容であるモダリティとから成る。また、モダリティとはその文の発話時 (瞬間的現在時) における発話者の心的態度のことであり、それは文の命題部分を作用域とする S (sentence) モダリティと、談話を適切に構成するために文間のスムーズな連結を確保することをその役割とする D (discourse) モダリティとに区別される。例えば、ある文の書き出しとして (6) のようなものがあつたとすると:

- (6) a. *Conversely, ideally, our company should ....*  
 b. 逆に、理想的には、私たちの会社は...すべきだ。

ここで、文の最初の“*conversely/逆に*”は前の文とのつながりを示す (確保する) 働きを持っており、Dモダリティの例である。2番目に出てくる“*ideally/理想的には*”は、発話者の意見 (主観) であり、その後続く命題を修飾しているので Sモダリティである。最後の“*our company/私たちの会社は*”は主語であり、命題の構成要素である。

また、英語では一般に、文頭に置かれる要素はその文の主題、つまり伝達されるメッセージを理解する際の基本的枠組み、と見なされる。モダリティや主題は本来、談話の構造に関わる概念である。単一の文に関してもそのモダリティや主題を論じることは可能のように思われるが、いかなる文であっても、周囲の状況や先行する文脈と無関係に発せられることはありえない。その発せられる文がその時点において、広い意味での文脈に照らし合わせて、適切であることを保証するものが、モダリティであり、主題である。

また、主題は、先に述べたように、発話者が情報伝達の枠組みとして自らの意志で選んだものであり、その意味で主観的であると言える。従って、主題は、それが文中のどのような要素であろうとも Dモダリティであると言える。(6) の例で言えば、主題は *Conversely* であり、発話者は「これに続く内容はそれ以前のものとは反対の内容になっているので、そのように聞いて理解して欲しい」という願いを述べているのである。これはまさに、発話時における発話者の心的態度であり、主観的なものであり、さらには、それ以前の文 (文脈) とその後続く文との橋渡しをしていることが明らかなるものである。

### 3. 説明

言及を簡単にするために、理由を表す because 節のうち、文頭に生じているものを前位の because 節、文末に生じている because 節を後位の because 節と呼ぶことにするが、この両者の違いを論じている文法書は少なく、同じ従属接続詞である since や as や for 等と because との違いを論じているものがほとんどである。また、両者の違いを正面から論じている山崎 (1983) でも、その違いの生じる原因を、主節と従属節の意味内容や情動的価値といったものに求めている。

これらに共通しているのは、「従属」接続詞という名称の通り、because の役割は基本的には従節を主節の一要素として主節に結びつけることであり、従ってその結び付きの中でのみ接続詞 because の役割は検証されうる、という考え方であり、これ自体には何の問題もない。しかし、前位と後位の違いということになると、特に前位の場合は、文内だけを見ているのでは不十分であり、先に述べた談話モダリティや主題といった新たな視点を加える必要がある。

では、具体例を見てみることにしよう。次の (7) はある大学用の教科書から引用したものである。

(7) James Dean was born in the farming belt of Indiana. When Jimmy was five, his parents moved to Los Angeles and settled in Santa Monica. His mother died four years later. *Because* his father could not work and take care of him too, Jimmy was sent to live with an uncle and aunt back in Indiana. .... (J.M. Vardaman, Jr., *Legends*, 松柏社。文中イタリック筆者)

この部分のある学生に訳させたところ (問題の because の前の文から書くと) 「彼の母親は4年後に亡くなった。なぜなら、彼の父は働くことが出来ず、彼の世話をすることもできなかったで..... (以下省略)」という訳になった。

この訳は明らかに間違いであり、この学生は because の「従属」接続詞としての役割を十分に理解していなかったと言えるが、ある意味では、文頭に来る語句の役割を (たぶん無意識ではあるが) 感じ取っていたとも言える。というのは、この前位の because 節を主節の後に移動した(8)は明らかに不自然な感じを与えるからである。(問題の箇所以外での不自然さを出来るだけなくすため、主節の主語の Jimmy を代名詞に置き換えてある。)

(8) .... His mother died four years later. He was sent to live with an uncle and aunt back in Indiana, *because* his father could not work and take care of him too. ....

従属接続詞の「従節を主節の一部として組み込む」という働きからすれば、(8)は何の問題もない。が、先行する文脈を

含めて全体の中で眺めてみると、because 節が文頭にあるのと文末にあるのでは全く違った印象を与えていることが分かる。

その原因がどこにあるかという、本来の語順である(7)を見れば分かるように、このくんだりでは「Jimmy がインディアナの叔父叔母夫婦のところに連れ戻されたのは、母親が亡くなり、父親も彼の世話をすることが出来なかったためだ」ということを述べたいのだが、(8)のような言い方をすると、Jimmy が連れ戻されたのは「父親が働けず彼の世話をすることが出来なかったので」ということが大きな、そして直接的な、理由のように感じられ、直前の母親の死について述べている文が、Jimmy が連れ戻されたことと関係がないかのような印象を与えるからである。先に述べたように、理由を表す because 節は命題内容の一部であり、主節の内容に制限を加えるものであるので、このような解釈になるのは当然のことと言える。

これに対して (7) では、主節の内容に制限を加えるという意味で because 節の働きは (8) の場合と同じであるが、それが主節の前に置かれ、直前の「Jimmy が連れ戻された」ことの理由となっている出来事を述べている文と連続する形になっているため、(8) のように、母親の死と父親の事情が別個のものとして認識されずに、むしろ二つの事情が関連したものであるように感じられるのである。

以上の観察から、前位の because 節に関して次のような仮定を立ててみよう。

(9) 前位の because 節が用いられる場合というのは、その前にも because 節の主節で述べられている事柄に対する理由がある場合であり、この because 節は、そういった複数の理由を結びつけ主節で述べられている事柄に対する理由として提示するという、談話上の役割を担っている。つまり、文頭の because は、「先に理由を述べましたが、まだ理由は続きますので、そのように聞いて下さい」という話者の心的態度の表明であり、これがまさに文頭の because が有する談話モダリティである。

以下、この仮定が正しいかどうか、他の例について検証してみることにしよう。(10) は Quirk, et al. (1985. 14.7) の説明の文からの引用である。

(10) The normal range of clause types is available for most nonfinite clauses, as in this set of to-infinitive clauses: (省略) Because it is generally both syntactically and semantically passive, the -ed participle clause is restricted to the four types of passive clauses. (以下省略) (下線筆者)

ここは nonfinite clause のタイプとそれが取りうる文型について述べた箇所である。because 節の主節 (直下線部) で言いたいことは「-ed participle の場合は、7つの文型のう

ち(目的語を含む)4つの文型にのみ(その生起が)制限される」ということであり、その理由として、because節で「-ed participleは統語的にも意味的にも受動態なので(つまり目的語が関係している構文が元になっているので)」ということ述べている。ただしこれだけでは理由としては不十分で、その前に、書き出しの文で述べられているように「nonfinite clauseはほとんどのタイプで7つの文型を取りうる」ということを理由その1(あるいは前提その1)として提示している。つまり「ほとんどのnonfinite clauseでは7つの文型全てを取りうるのだが、-ed participleの場合だけは、元々受動態なのだから目的語を含む構文にしか生じ得ず、従って7つのうちの(目的語を含む)4つに(その生起が)制限される」ということを述べているのである。

この例でも、文頭のbecauseを挟んで二つの関連する理由(波下線部)が述べられ、それが全体としてbecause節の主節(直下線部)の内容に対する理由として提示されていることが分かる。

次の二つは、先にbecause節の分布に関して調査の資料としたアメリカ小説*Airport*からの引用である。(同じく下線筆者)

(11) Aviation, Mel Bakersfeld had pointed out, was the only truly successful international undertaking. It transcended ideological boundaries as well as the merely geographic. Because it was a means of intermingling diverse populations at ever-diminishing cost, it offered the most practical means to world understanding yet devised by man. (p.72)

(12) Lieutenant Neel, who was fulfilling his part-time military training requirements, had been sent up solo for VFR proficiency flying. Because he had been cautioned to do only local flying in an authorized area northwest of Baltimore, no flight plan had been filed; therefore, Washington Air Route Center had no knowledge that the T-33 was in the air. (p.156)

(11)は、航空機産業が世界規模の相互理解を可能にした理由として、地理的な境界だけでなくイデオロギー的な境界も越えることを可能にしたということ、また料金がますます安くなるので様々な人種の交流を可能にした、ということの二つを述べている文章である。また(12)では、航空管理センターにフライト計画が届け出られずにフライトが行われているのは、有視界飛行の訓練であり、なおかつ限られた空域での飛行であることがその理由である、というようなことが述べられている。いずれも(10)の場合と同様、文頭のbecauseを挟んで二つの関連する理由(波下線部)が述べられ、それが全体としてbecause節の主節(直下線部)の内容に対する理由となっている。(11)(12)ともbecause節を主節の後に移して(13)(14)のようにしてみると、かなり奇妙な感じになり、(11)(12)では二つの理由が意味のある形で結

びつけられていることがはっきり分かるであろう。(イタリック筆者)

(13) Aviation, Mel Bakersfeld had pointed out, was the only truly successful international undertaking. It transcended ideological boundaries as well as the merely geographic. It offered the most practical means to world understanding yet devised by man, *because* it was a means of intermingling diverse populations at ever-diminishing cost.

(14) Lieutenant Neel, who was fulfilling his part-time military training requirements, had been sent up solo for VFR proficiency flying. No flight plan had been filed, *because* he had been cautioned to do only local flying in an authorized area northwest of Baltimore; therefore, Washington Air Route Center had no knowledge that the T-33 was in the air.

先に述べたように、because節の分布(前位/後位)は非常に偏っており、前位のbecause節の例はかなり少ないのだが、そのいずれもが、(9)で述べた「前位のbecause節(あるいは文頭のbecause)」の談話構成上の役割(談話モダリティ)に関する仮定が正しいことを示していると言えよう。

さらに次の例は、仮定(9)を間接的に支持していると考えられる。(イタリック筆者)

(15) ..... Right now there are only around 800 female wrestlers in the entire United States. Melony says that she knows many girls who would like to wrestle. *But because* they are often teased and looked down on, many lose heart and give up. (J. Knudsen, *American Dream, American Reality*, 南雲堂, p.23)

(16) ..... Last week it (a medical journal) came out with information claiming that marijuana is useful in easing the pain and nausea of serious diseases like cancer and AIDS. Patients who smoked marijuana got immediate relief from their discomfort. *But because* marijuana is illegal in America (though it is widely available), doctors are not allowed to prescribe it. (同, pp.26-7)

(17) ..... In a restaurant, for example, which I visited sometimes, the waiters always warn the customers that the trays in which the pizzas are cooked and brought to the table are very hot and that they should take care not to burn their fingers. If there are three customers at a table then the waiter will repeat the same thing to each customer, even though all the customers have heard him say it to the first person. *Unfortunately, because* the restaurant is a very busy one, the waiters sometimes take so long

to bring the food that the pizzas are not hot at all!  
Even then they still say the same thing. (A. J.  
Pinnington, *Inside Out*, 三修社, p.15)

(15)~(17) の例は、いずれも前位の because 節を含むものであるが、because が文頭の位置を占めていないという点でこれまでの例と違っている。そしてそれぞれの談話において、because 節の前にある文で述べられている内容は、いかなる意味においても、because 節が修飾している主節で述べられている内容の理由とはなり得ていない。すなわち、(15)で「多くの女の子がレスリングをやりがっている」ということは「多くの女の子がレスリングをあきらめている」ことこの理由にはなり得ないし、(16)で「マリファナを吸うことによって病気によるひどい苦痛から解放されている」ということは「医師がマリファナを処方することが許されていない」ことこの理由にはなり得ない。また(17)で、「ウェ이터が全ての客に同じ注意を促す」ことは「冷めたピザがテーブルに運ばれる」ことこの理由とはなり得ないのである。

これらの例において、前位の because 節があるにもかかわらず、(9)で述べたような because の働きがないのは、because そのものが文頭の位置を占めておらず、従ってその固有の談話モダリティを持ち得ないからに他ならない。(15)(16)で話者の心的態度を示すのは等位接続詞のbutであり、(17)では文副詞の unfortunately なのである。(11)(12)の前位の because 節を後位に置き換えた(13)(14)が奇異な感じを与えるのと対照的に、(15)~(17)の前位の because 節を後位に置き換えた(18)~(20)が(情報的価値という点は別として)ごく自然な感じを与えることがそれを示している。(イタリック筆者。置き換えに際して一部省略してある。)

(18) ..... Right now there are only around 800 female wrestlers in the entire United States. Melony says that she knows many girls who would like to wrestle. But many lose heart and give up, *because* they are often teased and looked down on.

(19) ..... Patients who smoked marijuana got immediate relief from their discomfort. But doctors are not allowed to prescribe it, *because* marijuana is illegal in America (though it is widely available).

(20) ..... If there are three customers at a table then the waiter will repeat the same thing to each customer, even though all the customers have heard him say it to the first person. Unfortunately, the waiters sometimes take so long to bring the food that the pizzas are not hot at all, *because* the restaurant is a very busy one. Even then they still say the same thing.

以上の観察はこれまでとは逆の意味で、(9)の仮定が正しいことを示す一つの証拠となるであろう。

#### 4. おわりに

本小論では荻原(1999)で検討された従属接続詞whenが有する談話モダリティをふまえ、前位の because 節(とりわけ文頭の従属接続詞 because)が有する談話モダリティについて、その内容を検討してきた。その結果として、文頭の when は「談話に新しい場面が導入されますよ」という話者の聞き手に対するサインであり、文頭の because は「先に理由を述べましたが、まだ理由は続きますので、そのように聞いていて下さいよ」という話者のサインであることが、それぞれ示された。気をつけなければいけないのは、これらのサインは、「従属接続詞」という名称から一つの文の内部だけを見ていたのでは分からないものであり、また、辞書や文法書にも書かれていない類のものである、ということである。

今日の英語教育では上手にコミュニケーションをはかることを何よりも重要と考えているが、話者がその発話に対して抱いている心的態度を知ることが、コミュニケーションを成功させるための第一歩とさえ言えよう。その意味では、談話の構成に関する諸原理が今よりももっと教室で教えられなければならないし、そのために、談話モダリティを担う代表的な語句の一つ一つについて、本小論で行ったように、その固有の性質(サインの内容)を明らかにしていくことは、大変意味があることのように思われる。<sup>1</sup>

注1：本文中で、because 節の分布の偏りについて、アメリカのある小説からの統計を示した際、because of についても数値だけを提示しておいたが、because of の場合は、because 節の場合ほど、その談話モダリティの内容は単純ではないように思われる。その内のいくつかを以下に引用しておく。(イタリック筆者)

(a) In a minute. I was just going to tell you – *because of the storm* I may not be home tonight. There's a lot happening at the airport. ....(p.19)

(b) We can route you directly, sir, but we don't know when. *Because of the weather*, the longer way will be faster and the fare is the same.(p.21)

(c) She listened in silence to Mel's explanation – why it was essential he should remain at the airport. *Because of the lack of argument*, which he had not expected, he found himself floundering, with labored excuses not wholly convincing to himself. ....(pp.178-9)

(d) The important thing about all these insurance policies is that they go through channels. The applications are handled by experienced people; a day or so elapses between an application and the issuance of the policy. *Because of this*, there is a far better chance of the psychotic, the maniac, the unbalanced individual being noticed, his intentions questioned. (p.192)

(e) "There are several points we ought to think about," Mel continued." First, let's face up to the fact that most people have always had an inherent fear of flying, and I'm convinced that feeling will always exist, no matter how much progress we make, and however much we improve our safety record. ...." He went on: *Because of this inherent fear*, many passengers felt more comfortable, more reassured, with air trip insurance. (p.193)

引用が長くなり過ぎるため十分な文脈を示すことが出来ないが、一般的な印象として述べるなら、because of が文頭に用いられて理由を示す場合、その理由は前に既にどこかで述べられているものであって、because of は再度その理由を明示して、次に話を続けていく働きをしているように思われる。(a) (b) は、悪天候のため空港で様々なトラブルが生じている状況での話であり、the storm とか the weather とかは、既に何度となく(いろいろなトラブルの)理由として登場しているものである。また(c)では、前の文で彼女が黙って聞いていたということが述べられており、the lack of argument はそのことを言い換えたようなものである。(d) (e) では、because of 句の中にthisという先に出てきているものを指し示すはっきりした語があるが、このような表現の仕方はbecause of には多く見られる。

これに対して、because of が文末に置かれている場合は、既に出てきた理由を再度明示するというような用法は見られない。(イタリック筆者)

(f) This runway was almost two miles long and as wide as a short city block; an airport joke claimed that one end could not be seen from the other *because of the earth's curvature*. (p.62)

(g) The Line was moving fast —close to forty miles an hour instead of its usual twenty-five. The leader had probably speeded up *because of the expected wind shift and the need to have the runway open soon*. (p.65)

(h) Mel wanted to laugh out loud. Chindy didn't know. As usual, she had chosen to work for a charity *because of who was involved, rather than what*. (p.80)

(i) Tonight, buffeted by the storm, and flying solely on instruments with nil visibility outside their cockpits, demands upon their skill were multiplied. Most pilots had already flown extra time *because of delays caused by heavy traffic*; now they would have to stay even longer in the air. (p.88)

(j) The United States Supreme Court, he went on, had already set a precedent. In U.S. v. Causby the court ruled that a Greensboro, North Carolina, chicken farmer was entitled to compensation *because of*

*"invasion" by military planes flying low above his house*. (p.104)

いずれの場合も、because of によって提示されている理由は、その時初めて出てきた新しいものである。

以上のことから、because of が文頭に生じている場合の談話モダリティは「既に述べたこと(理由)ですが、もう一度ここで確認しますから、よく聞いて下さい」といったようなものだと考えられるが、もう少し多くの例について調べてみる必要があるように思われる。

## 参考文献

- 有村兼彬, 天野政千代. 1987. 『英語の文法』 英潮社新社.  
 Birner, B. J. 1994. "Information Status and Word Order: An Analysis of English Inversion." *Language*. Vol. 70, No.2, pp.233-259.  
 Bolinger, D. 1968. *Aspects of Language*. Harcourt, Brace & World, Inc.  
 Celce-Murcia, M. and D. Larsen-Freeman. 1983. *The Grammar Book: An ESL/EFL Teacher's Course*. Newbury House Publishers, Inc.  
 Declerk, R. 1991. *A Comprehensive Descriptive Grammar of English*. Tokyo: Kaitakusha.  
 福地 肇. 1985. 『談話の構造』 新英文法選書. 第10巻. 大修館.  
 福地 肇. 1995. 『英語らしい表現と英文法』 研究社.  
 Halliday, M.A.K. 1967. *Intonation and Grammar in British English*. The Hague: Mouton.  
 Hooper, J. and S.A. Thompson. 1973. "On the applicability of root transformations." *Linguistic Inquiry*. Vol.4, No.4, pp.465-498.  
 McCarthy, M. 1992. *Discourse Analysis for Language Teachers*. Cambridge Univ. Press. (安藤貞雄, 加藤克美 (訳) 『語学教師のための談話分析』 1995. 大修館.)  
 村田勇三郎. 1982. 『機能英文法』 大修館.  
 中右 実. 1984-6. 「意味論の原理」 *英語青年*. Vol. 130, No.1-Vol.131, No. 12.  
 成田義光, 丸谷満男, 島田守. 1984. 『前置詞・接続詞・関係詞』 講座: 学校英文法の基礎. 第6巻. 研究社.  
 荻原 洋. 1999. 「従属接続詞の談話モダリティとその英語教育における意義について」 *富山大学教育学部紀要*. 第54号, pp. 79-89.  
 大津隆広. 1989. 「談話における非制限的關係詞節の機能」 『英語学の視点』 九州大学出版会.  
 Quirk, R., S.Greenbaum, G.Leech and J.Svartvik. 1985. *A Comprehensive Grammar of the English Language*. London: Longman.  
 Thompson, E. 1999. "The Temporal Structure of Discourse: the Syntax and Semantics of Temporal

*then.*" *Natural Language and Linguistic Theory*.  
Vol.17, pp.123-160.

Thomson, A.J. and A.V. Martinet. 1960. *A Practical English Grammar*. Oxford Univ. Press. (江川泰一郎(訳). 1973. 『実例英文法』 研究社.)

山崎和夫. 1983. 「because の語順と「ノデ」「カラ」」 英語教育. Vol.32, No.6, pp.75-77.

安井 稔. 1982. 『英文法総覧』 開拓社.